エンデの遺言

河邑厚徳＋グループ現代　著

お金の機能

１. モノや労働をやりとりする交換手段としての機能

２. 財産や資産の機能
(貯めこまれ流通しないお金)

３. 銀行や株式市場を通じてやりとりされる資本の機能
(お金そのものが投機の対象)

いくらでも印刷できる紙幣、さらにはコンピュータ上を飛び交う数字となったお金は
実体がないまま世界中を駆け巡る

現代の通貨はまったく違う機能を同時に持たされ、それが日々変動しながら世界を駆け巡り
生活や生産の場を混乱させている

自己増殖するお金の問題

「錬金術的に自己増殖するお金の問題」＝「お金の資本としての機能」

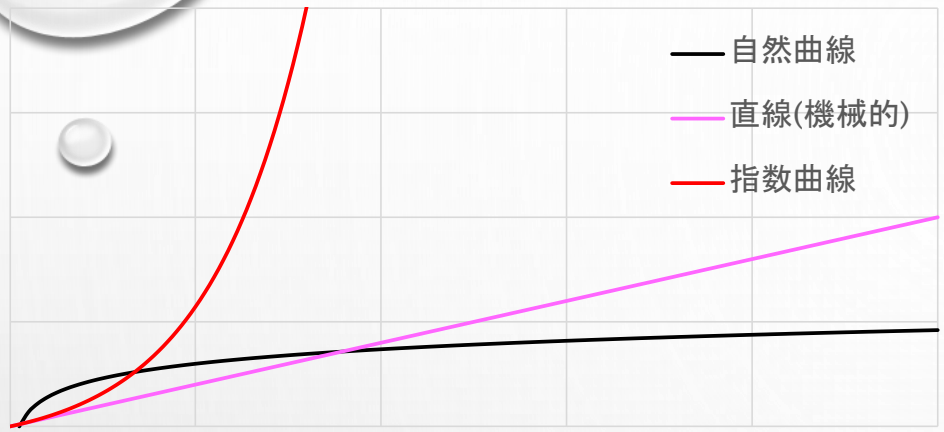
株式経済は成長を基盤としている
→分配される利益配当、株価が課題

株式経済の利潤とは手元に戻ってくる金額であり、普通は利潤を再投資する
成長とは投資のこと

株所有者は将来的な利益向上のためにより多く出資し、さらなる利益を得ようとする基金形態
→このような基金形態が企業の生成にとっていいものなのか？
　基金形態は何を生産するのかという企業目的に多くの出資をすべき

　生産がより多くの意味をもつようにすることをわれわれはよく考えなくてはいけない

利子が利子を生む複利



＜自然曲線＞
自然界の成長曲線を単純化
＜機械的成長、直線的成長＞
人間が増えれば商品が増える
石炭が増えればエネルギーが増える
※限られた容量の地球情では維持不可能
＜指数曲線＞
通常、自然界においては病気や死に関わるところで見られる

利子が利子を生むというのは指数的な成長を示すのでいかに非現実かがわかる

利子が膨れ上がっていくと、経済的な破滅か地球環境の崩壊に直面する
資金を借金によって調達し、それに対して利子を払っている国が最大の債務者

多くの国は、今日、個人としてなら銀行から一銭も貸してもらえない局面に陥っているが
このシステムから利益を得ているのは一握りの資産の所有者
(アメリカでは人口の1%が、その他99%よりも多くを所有している)

どんどん貧しくなる国があり、自然環境も奪われ続けている
その一方で小数の者たちが、法外な利益を吸い上げているのがいまの経済システム

安定したお金のシステム

＜市民の生活感覚＞
お金を節約し、銀行に預けることで受け取る利子は少ない
住宅や車を手に入れるために支払う利子は大きな負担がある
＜実際＞
この経済システムのなかで生活している限り物価には利子部分が含まれており、
利子は支払わざるを得ない仕組みになっている

もし利子をやめて別の有効な流通メカニズムを採用することができたら所得は増える、
もっと働く時間が少なくなる

現代の経済システムでは、自然と環境を破壊し、貧富の差を拡げている
先進国は新興国から利子をもらい続けている

利子をなくし、安定した経済システムへ根本的に変革することは、個人レベルでできることではない
しかし、お金に対する意識を変えることは個人レベルでもできる
自分のお金が倫理的に問題のない生産物やプロジェクトに投資されるよう心掛ける
自分が購入する生産物が環境に優しい方法で社会的に問題を引き起こさないように作られているか

現代のお金が持つ問題

お金自体が商品として扱われている

等価代償であるべきお金が、それ自身商品となり、お金自体が売買される

お金の本質を歪めている要素を説明するのにシュタイナーの社会有機三層論で説明

人間は3つの異なる社会的レベルの中で生きている。

1. 国家、法のもとの生活に属している
2. 生産し、消費することで経済生活の中で生きている
3. 美術館や音楽会など文化生活の中で生きている

今日の政治や社会が抱える大きな問題は、3つの「生の領域」は
本質的にまったくことなるレベルなのに、この3つが一緒にされ
別のレベルの理想が混乱して語られていること

自由・平等・友愛

フランス革命のスローガン「自由・平等・友愛」は革命前からあるコトバ
(元はフリーメイソンのスローガン)
「自由・平等・友愛」は3つの異なる社会レベルに相応する

自由は精神と文化(文化生活)
平等は法と政治(国家、法のもとの生活)
友愛は経済活動
※工業社会は誰もが他人のために仕事をしたほうが社会全体の利益になると考える社会

ここで友愛＝経済活動には違和感が生まれる
「分業＝他人のために働く」だが、現実の世界では他人を踏みにじり、人と人を分断するエゴイズムに満ちている

経済学では、自由な市場での競争こそが経済の大前提だが、
「自由」を原理とした経済がもたらしたものは

1. オゾン層の破壊、酸性雨、大規模な海洋汚染、地球温暖化規模の環境破壊
2. 発展途上国の飢餓がある一方で、
   大量生産・大量消費・大量廃棄の飽食生活を続ける先進国
   (その先進国でも貧富の差が広まっていくというアンバランス)

お金とはなにか？

お金は、便利な道具として作りだされたはず
それがいつの間にか人はお金に使われている

＜物々交換の困難＞

・私が必要とする生産物を保有するひとびとが必ずしも私の生産物を必要としない
(あるいは、彼らが提供する商品の量に応じた私の生産物の量を彼らが必要としない)
・交換の取り決めが成立しても相手が本当に信用できるかわからない
・交換者が同じとき、同じ場所にいなければ取引は不可能

＜お金の登場＞

売る(販売)と買う(購買)が分かれ、違った場所、別の時でも売ったり買ったりできるようになる
→人間関係の信用がお金により担保されるようになる。(購入者が誰であるか無関心でいられる)
→取引で匿名でできる可能性が与えられ、人間が自立的な個人でいられる基礎ができる
→人の信用が金銭上の信用に変わっていく

お金は物々交換のときに交換者が保有する財産とは違った、他の財産よりもすぐれたモノになる

交換を利便にする手段であったお金が、お金自体が目的であるように意識され
お金を持つものに権力が生まれる

お金とはなにか？

お金の導入で取引での費用を大幅に節約することができるようになった

取引相手の信用を調査する必要がなくなった
物々交換の頻雑さに伴う取引コストが不要になった
取引を個々の小規模な取引に分割することができるようになった

取引の実行が物々交換に比べてはるかに少ない情報で行えるようになり
お金の導入が社会に分業の発展をもたらした。
→お金への人の依存が増すようになる
→社会全体でみると、お金を持つ人間に取引を妨害できる可能性を与えることになった

余裕のある貨幣保有者が出現してお金を蓄えることができると、お金不足を生み出すことができる
→貨幣保有者はお金を貸し付けることで利息を取り始める
→一度、利息を取って貸し付けることができると、貨幣保有者はさらにお金をかき集め経済の機能を阻害する

お金とはなにか？

お金は値打ちを持っている
値打ちがお金という形の容器に入っている

お金はビルや家屋やいろいろな形を取ることもできるが、人はお金という容器に入れておきたがる

お金だけは減価しないという特別な性格があるし、
さらに貸し付ければプラスの利子がついて値打ちが増え、それ自体が増価していく。

いざというときに、何とでも交換できる流動性もある

お金の特権性、利便性は、誰もがお金を受け入れるから成り立っている
お金を持つことで享受できるこうした利点は、お金を持つ人の何かの能力に依存しているわけではない
→社会がそうしたお金の利便性を保証している。お金は公共物であることを保証している。

お金を使うことで得られる利便性があるならば、受益者はそのための料金を社会に対して支払って当然と考えるようになる

いまのお金のシステムの問題

お金を使うことに対しての料金が社会に支払われるのではなく、
お金をかき集め、活用する人に利子という報酬を払っている

＜例＞
鉄道を利用する人は切符を買う、高速道路を利用する人は高速料金を支払う
お金を持つ人は、無料で通る人のようにふるまい、貸し付ける場合は、道路の真ん中に車を止めて人の通行を妨害し、妨害を止めてほしければ、自分に利子という料金を支払えと言っているようなもの

お金が交換の手段であれば、世の中の商品やサービスを運ぶ道路のようなもの
しかしお金には値打ちを将来に向かって維持する機能がある
→その機能があるためにひとは貨幣を渇望する

お金の機能の問題

＜お金の機能＞
　交換手段の機能
　価値の保蔵機能　問題は価値の保蔵機能にある
　価値の尺度機能

ひとは一つのお金をつくったつもりでいるが、実は2つ創造してしまった
　１．交換の役に立ち、これを促進し、経済の血液の役目をするお金
　２．値打ちを減らさず、価値を保蔵し、場合によっては貸し付けて値打ちを増やすお金
　　１．２は経済的にみれば両立は不可能

世の中には生産されたり、提供されたりするサービスしかない
これを配分しあうのは、それぞれの財やサービスの提供を通して必要なものが与えられ
受領されていく形しかない
しかし、お金は財やサービスを提供しないのに、公共物のお金自身の流通を妨げて
料金を請求する仕組みを同時に持ってしまった

利子は国民が生産したすべてに対する先取り。
音楽に合わせてイスの周りを人が回り始め、音楽がやむと、みんながイスに座る
しかし、イスは一つ足りない。足りない1つは利子として取り去られた分
そうして、ひとり社会から落伍者がでる。
また、音楽が鳴り始めると、イスが一つ足りなくなっている。こうしてゲームは続いていく

生活や実体経済に打撃を与えるお金

1971年、ニクソン大統領が金とドルの交換停止を発表。翌年から変動相場制に移行
それ以降、私たちは前例のない経済を生きている。

多くの人はお金とはなにかによって担保されているべきだと考えてきたが、
もう世界中のお金は何によっても担保されず、ただ信用だけで成り立っている
それでもお金はお金の役目を果たしている。

お金には契約の精算手段としての4つ目の機能もある
いま世界中で動いているお金の95%以上が実際の経済の商品やサービスの取引に対応したものではない。単なる金融上の取引に使われている

お金の市場(資本市場)がほとんどの国で自由化され、
お金(資本)はより高いリターン(収益、儲け)が得られる経済を探して流れていく

お金が外国から入ってくると、その国のお金の量(マネーサプライ)が増える。
お金の出し手が増えるから、貸出競争がお金を借りるときの費用(利子)を下げる
お金持ちはお金をお金以外の資産に変えようとし、資産の価格が上がる。
資産の価格が上がると、その国のお金の値打ちは別の国のお金の値打ちより高くなる(通貨が強くなる)
強い通貨を持つ国は同じ量の商品を外国から買う場合、より安く買えるようになる
反対に、国の経済がおかしくなりそうな場合にはお金は逃げてしまい、逆のことが起きる

金融システムの手品(信用創造)

お金が作りだされると、人の実質的な信用は金銭上の信用に変わってしまう
私たちが生きる現実の経済がお金の次元に支配される

1998年の日本のGDPは474兆円。(国民が生産したモノやサービスが売れた金額)
日本に出回っている銀行券は50兆円もない。

同じお札が何回も使われて取引が実現された？
減価するお金ではないから、10回近くも使われることはない。

しかし、474兆円の取引は存在している

どこかでお金が創られている、それこそが信用創造

莫大なお金が、信用貨幣という形で、
金融システムの中で、お金の貸し借りを通して創り出されている

お金の利子率

利子率を決める要因は2つある

＜お金の流動性のプレミアム＞

お金はなんとでも交換できる高度な社会性をもっており、誰もが貨幣を欲しがる貨幣欲求
歴史的にどの時代でも貨幣利子率は4～5%

＜お金が希少であることの代価＞

市場へモノやサービスが供給され、これらが全部売れるためにはお金が必要
モノやサービスに対応したお金の需要が起こるが、お金の供給が保証されているわけではない
お金を欲しがっている人と、お金を都合をつけてもいい者の間には不平等が存在する
お金を持つ者は、いまのお金は減価しないことを知っており、
お金の蛇口を締めたり緩めたりできる力を持っている
蛇口から出るお金の流れが細いほど、お金の価格は上がり、利息は増える

信用貨幣(数字のお金)

数字のお金は銀行の口座にある
数字のお金は銀行口座が生まれるときに始まる

銀行口座がつくられたり、増やされたりするのは貯蓄と借入のとき

＜貯蓄口座＞
　貨幣の移転
　人がポケットに持っているお金を銀行口座に預ける。
　自分が使えるお金を数字のお金に変えるだけなので、新しく生まれることはない

＜借入口座＞
　銀行が借り手に貸し付けた口座
　事業家が、100万円借りるとする場合、銀行は利息付で返済してもらう約束をする。
　事業家は紙幣で100万円を手元に持つわけではなく、事業家が100万円を
　銀行に持って行ったかのように口座に数字の100万円を作り出す
　金融システムが100万円の数字のお金を新しく生み出している

お金は実は信頼できないかもしれない

国境のなくなった金融市場では、お金自体が取引の対象とされたり、
銀行間で再預金しあう形でつくりだされた莫大な金額が投機に投じられている

人の生活や経済、地球環境自体にまで影響を与えている

累積債務に苦しむ途上国と自然は、犠牲を強いられ続けている

お金を崇拝する対象から、人と自然のあり方に密着した、信頼されるものに戻す必要がある

「貨幣と神は幾分、相似している。両者ともわれわれがそれを信頼するがゆえに、
ただそのゆえにのみ存在する」

これほどの問題を起こす、いまのお金は実は信頼できないかもしれない

連帯のなかで支えあう地域通貨

通帳の数字が豊かさの証ではない。
豊さとは、必要な物が必要なときに、必要な場所で手に入るということ

人は100%不信のなかで、人生を送るわけではない
信頼し、人と信頼しあう関わりをつくることで将来への確かな希望を持つこともできる
人を50%信じているのならば、その分に見合った連帯の関係をつくるべき

そうした人と人が手を結びあう関係には、競争を強い、勝ち負けをはっきりさせ、持っている者には有利で無い者には不利である通常のお金のシステムではよい関係をつくることはできない

競争ではなく、お互いが高めあうような競いあい、連帯のなかの支えあい、
そうした関係をつくるための通貨が必要。そのためには地域通貨が最適

地域通貨は住民自らがそのイニシアティブで始められる
自分たちでお金をつくり、金融機関が握っていた貨幣供給の人為的コントロールという
貨幣をもつ者の権力支配を受けない。ゼロ利子やマイナス利子も実現できる
地域通貨のなかでは、取引に必要なときにお金は生まれ、プラスポイント、マイナスポイントが
精算されるときにお金は死ぬ

地域通貨は交換の役に立つだけのお金になる

減価するお金のシステム

利子は利付き貸借のなかで確定されたもので、これは資本コストとして必ず生産コストの中に入り込んでいる。
人は利子を負担させられるのはお金を借りたときだけだと誤解しがちだが、
実はモノの価格にはほぼ25%の利子が含まれていると言われている

資本家は利子を覚悟で貨幣を借り入れ、投資し、事業が行われ生産物が販売される
事業がうまくいくときもあるし、うまくいかないときもある。
うまくいかないときには、利潤は出てこない。利潤は常にリスクと関連している

しかし、利子は産出高に何の関連ももたないプレミアムである。

地域通貨は、社会に負荷をかける利子システムがある通貨制度ではないお金の仕組みを作る
既成の貨幣システムの諸問題の自覚につながるし、価値観の変化を生み出す

人類はつねにプラスの利子のつく貨幣システムで生きてきたわけではない。
古代世界でエジプトは世界最先進国であったが、いまは発展途上国の国家
今日のような状況にあるのはお金のシステムである。
古代エジプトでは、減価するお金のシステムを持っていた。
ローマ人がエジプトを支配し、プラスの利子のつくシステムを強制されたとき
エジプトの繁栄が終わった